

## 一般演題ポスター 32 前立腺腫瘍 監視療法など

2018 年 4 月 20 日 (金) 15:30-16:30  
ポスター会場 1 | 国立京都国際会館 1F イベントホール

座長：仲野 正博 (岐阜大学大学院)

## PP2-068

### 初回前立腺針生検陰性例に対するナフトピジルによる前立腺がん発生頻度の低下効果に関する前向き無作為化比較研究

山田 大介<sup>1</sup>、松島 常<sup>2</sup>、榎本 裕<sup>3</sup>、村田 高史<sup>4</sup>、牧野 克洋<sup>4</sup>、立川 隆光<sup>5</sup>、中野 敏彦<sup>5</sup>、阿部 真樹<sup>5</sup>、塩澤 勉夫<sup>5</sup>、東 剛司<sup>6</sup>、粕谷 豊<sup>7</sup>、鈴木 基文<sup>8</sup>、佐藤 ゆずり<sup>8</sup>、西松 寛明<sup>9</sup>、石川 晃<sup>10</sup>、角谷 成紀<sup>10</sup>、岡根谷 利一<sup>11</sup>、永本 将一<sup>11</sup>、山田 雄太<sup>12</sup>、中川 徹<sup>13</sup>、宮寄 英世<sup>13</sup>、加藤 温<sup>14</sup>、榎淵 啓史<sup>15</sup>、近藤 靖司<sup>16</sup>、久米 春喜<sup>17</sup>、井川 靖彦<sup>18</sup>、藤村 哲也<sup>1</sup>、内藤 晶裕<sup>1</sup>、田中 基嗣<sup>19</sup>、高田 宗典<sup>19</sup>、上村 夕香理<sup>19</sup>、宮川 仁平<sup>1</sup>、森川 鉄平<sup>20</sup>、福原 浩<sup>1</sup>、本間 之夫<sup>21</sup>

1:東京大学、2:東京警察病院、3:三井記念病院、4:青梅市立総合病院、5:鎌ヶ谷総合病院、6:東京都立多摩総合医療センター、7:東京都健康長寿医療センター、8:東京通信病院、9:同愛記念病院、10:日本赤十字社医療センター、11:虎の門病院、12:千葉徳洲会病院、13:帝京大学医学部附属病院、14:埼玉メディカルセンター、15:東芝病院、16:東京都立墨東病院、17:国立国際医療研究センター病院、18:東京大学大学院 コンチネンス医学講座、19:東京大学臨床研究支援センター、20:東京大学 人体病理学・病理診断学、21:日本赤十字社医療センター

【背景】我々は前回の研究で、ナフトピジルががん細胞にアポトーシスを誘導し増殖を抑制させること、後ろ向きではあるがタムスロシン内服群 (3.1%) に比べてナフトピジル内服群 (1.8%) で前立腺がんの発生率が有意に低いことを見出した。そこで今回、前向き無作為化比較研究でナフトピジルの前立腺がん発生予防効果について検証研究を計画した。

【方法】本研究は多施設共同非盲検無作為化比較試験である。初回前立腺針生検で陰性だった前立腺肥大症症例のうち、すべての選択基準を満足し、除外基準に抵触しない症例を対象に、ナフトピジル投与群、非投与群に無作為に割付後、1 年毎に血清 PSA 値を測定する。血清 PSA 値が前回生検前直近値より上昇した場合には前立腺針生検を行い前立腺がんの有無を確かめる。登録割付日から前立腺がんの判定日までの期間を主要評価項目とし Kaplan-Meier 法を用いて各群の前立腺がんイベント発症確率を求め、log-rank 検定により群間比較を行う。

【考察】ドキサゾシンやテラゾシンなどの  $\alpha 1$  アドレナリン受容体遮断薬がアポトーシスを起こしてがん細胞の増殖を抑制することは 1994 年から報告されている。その後、アポトーシスを誘導する経路は  $\alpha 1$  アドレナリン受容体を介さない事、タムスロシンなど一部の  $\alpha 1$  アドレナリン受容体遮断薬ではアポトーシスを誘導する効果がないことなどが報告され、2007 年には後ろ向きの研究であるがドキサゾシン、テラゾシンの内服者は非内服者に比べ前立腺がんの発生率が低かった (1.65 % vs 2.41%) と Harris らが報告した。ナフトピジルは  $\alpha 1$  アドレナリン受容体サブタイプ B への親和性が低く血圧低下の作用が少ない薬剤で、日本では前立腺肥大症の治療に使用されており、2008 年に神田らから前立腺がん細胞株の増殖を抑制すると報告された。本研究は  $\alpha 1$  アドレナリン受容体遮断薬が前立腺がんの発生率に影響するか検証する初めての前向き臨床研究である。